

## 第一次国共合作におけるコミンテルン 軍事顧問の役割（18）

А.И.Черепанов: Записки Военного Советника в Китае

滝本 可紀

一般科

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First Kuomintang  
and Chinese Communist Party Cooperation (18)

Yoshinori TAKIMOTO

### Abstract

The revolution of 1925-1927 ended. The Chinese people suffered a temporary defeat. The main reason was that the forces were unequal. The warlords, landlords, gentry, compradors, imperialists and their agents were still much stronger and politically more experienced than the working people who had risen to the struggle and their leaders. The revolution opened the eyes of millions. History could not be turned back. Until the last day that advisers were in the service of the Chinese revolution, they were faithful to the cause of Chinese nation's liberation. Ten years passed, Cherepanov set out once again for the Chinese land to extend a helping hand to China which had been attacked by Japan.

Key Words: Military Adviser, National Revolution Army, Northern Campaign

以下は国民革命軍軍事顧問А.И.Черепановの回想録〈Записки Военного Советника в Китае〉の1976年HAYKAの570頁から597頁の全訳である。

上海市の解放に繋がった、上海のプロレタリアートの三回の蜂起の時にも共産党の未熟さはある程度みられた。労働者達は最も重要な経済的、政治的センターを奪取した後、戦うことなく蒋介石にそれを返してしまった。それどころか、組織活動の能力を有する優秀な幹部を多数失うことになった。ところが上海のピケ隊員はライフル銃で武装していただけではなく、彼らの中には機関銃さえも持っていた者がかなりいた。また、民衆を基礎とした、広範な構成員から成る政府を作ろうとする試みがなされていた。労働者達は陰險な攻撃のやり方に対し準備ができておらず、組織的に退却をする技術も会得していなかった。中国共産党中央委員会及びその指導者である陳独秀はこの数ヶ月間一度ならず、プロレタリアート政の指導部にはふさわしくない役割を引き受けた。

1927年5月中旬、国民党の武漢組織の一つが二人の資本家を逮捕し、彼らの機械製造工場と石油貯蔵庫を没収した。国民党中央執行委員会は既に採択されていた

措置の廃止の決議を行った。そうしたところへ1927年5月18日、陳独秀は〈革命と秩序〉という文章を公表した。その中で漢陽の人々が党の政策に違反していると責めた。それと時を同じくして、国民党中央執行委員会は企業家や商人達との統一戦線を無条件に維持し、また彼らを国民党員が保護する指令を公布した。統一戦線の戦術を継続する路線は多分正しかったであろうが、陳独秀が国民党機関誌にそのような公式の文章を発表する事は妥当であっただろうか。

よく知られているように、1927年3月10日、国民党中央執行委員会全体会議は中国共産党に武漢政府の2つのポストを提供する決議を採択した：劳工部と農政部。前者のポストに蘇兆征が5月末にようやく任命された。彼はこれを機会に1927年6月11日付けの〈People's Tribune〉に声明文を発表した。その中で、近い将来労働者と経営者との紛争調停、社会保険、失業者救済に関する法律及び指令を採択することを約束した。さらに次のように述べた：〈労働者、農民の中で最近解放された人々が理不尽な行動をとり、その結果、労働者側と工場主、商人側との革命的連帯に大きな障害を引き起こしている証拠が数多くある。今後、国民党中央機関の

指令に違反する労働者組織及び個々の労働者は嚴重に処罰されるであろう。労働者の利益に反する行動をとる組織や個人はまた嚴重に処せられるであろう。

譚平山は後者のポストに就いた。ボロジンの評価によれば、彼は＜省内で何もせず、すべてのことを無意味だと考えていた。何の施策も、法律も実行せず、それどころか、やろうともしなかった＞。あまりにも不適切な政府の声明や政策に基づいて行った政府の活動からは十分な成果は上がらなかった。中国共産党中央委員会は蘇兆征に海外へ出るための休暇届を提出するようにとの決議を採択した。一方、譚平山は入院した。6月30日の＜People's Tribune＞に譚平山の文章が掲載された。その中で彼は特に次のように述べた：＜私は農民運動を正しい道に向けるために一貫して努力した。最近の事件は農民運動の方向に対してこれ以上私が責任を取れないような深刻な政治状況をつくった。私は今や、肉体的に仕事を続けることができないので、その任務から身を引きたい＞。

このようにコミュニストの大臣達は初め、大衆運動を押さえる役割を正式に引き受けたが、それは党の革命綱領とは絶対に両立できないものであった。実現のための現実的な基盤は全くないのに誇大な声明を出して、その後彼らの戦術の誤りが明らかになった時、彼らは全く正当な理由もなく政府を去った。かくて、大衆を正しい方向に導く絶好のチャンスを逃した。これは中国共産党中央委員会の重大な誤りであり、それは戦術的手腕を欠いていること、指導方針が誤っていることを証明している。ボロジンの次の言及は正しかった。左派国民党のとう演達が発表した公開状はコミュニストの大臣が政府を離れたことに関して共産党中央委員会が公表したものよりもはるかに毅然とし、大衆にとっても理解しやすい文章であるように見えた。当時、共産党内部には正しい戦術を決定するに際し極めて深刻な対立があり、共産党指導部と共産主義青年団指導部との間にも意見の一致がなかった。例えば、5月30日に農業問題に関する大衆向けの活動方針が発表され、それには次の様に書かれていた：＜農村における封建主義は革命的手段によって精算されねばならず、またブルジョアジーと公然たる闘いを始めねばならない＞。

中国革命の英雄、共産主義者のうん代英はかつて黄埔軍校で教育を受け、1927年6月10日＜民国日報＞に＜農民運動における左翼小児病＞と言う文章を載せた。その要点は以下のとうりであった。長沙のクーデタは農民運動の中に有った＜左翼小児病＞によって引き起こされた面を幾分か持っているが、クーデタについて農民運動だけを非難することは大きな誤りであろう。この＜左翼小児病＞の中に、農民達の土地に対する渴望や封建的支配者の権力から解放されたいという願いが見て取れる。土地を分配せよというスローガンは多くの貧農に漲っていた土地に対する飢餓感を表していた。農民運動の中には多くの＜浮浪者＞がいたと言われている。これ

は事実だが、これらの土地を持たない農民達が土地を要求していることを理解しなければならない。この進歩的な運動を押さえ、それを鎮圧したいと思っている人々、土地の分配に反対したり封建的な制度を維持しようとしている人々は言うまでもなく反革命分子である。

かくて、共産主義運動の内部に、この革命の最も決定的な時期に、革命にとって最も重要な農業問題の戦術に関して殆ど正反対の見解が存在していた。この異なる見解を前にして、それぞれの戦術案を実現する可能性がどの程度あるかという問題は未解決であった。見解の相違はどちらかということ、純粋に理論的論争の性格を帯びているように見える。というのは、どちら側も大衆に対して十分な影響力を持ち得ず、また自分の路線を実現させるように大衆を導く能力を持っていなかった。

中国共産党は既に述べたが、国民党農業委員会の活動に参加していた。ボロジンはこの事を次のように評した：＜中国共産党の代表の立場には大きな動揺があったことは特徴的である。譚平山は確固とした考えを持っていなかった：彼は、今日は全面的没収に賛成したかと思うと、明日は政策を入れた没収に賛成した。委員会にいた共産党員の数だけ意見が存在した。譚平山及び委員会に所属する共産党員達はこの問題に関して、はるかに右派的立場をとった＞。最も重要な問題に対する戦術がこのように分かれていたので、コミュニズムの若い党にとって明確さと積極さが必要なこの時、組織が無力に成らざるを得なかった。前に述べた湖南省のクーデタの時にも状況は同じであった。一般の共産党員や共産主義青年団員は典型的なヒロイズムを発揮し、自分たちの崇高な思想の勝利のため、また中国の解放のために献身的に命を捧げた。許克祥が湖南組織の書記と共産主義青年団の5人のメンバーに、死ぬか党を出るかはいずれかを選ぶよう提案したが、彼等は自分の信念を裏切れることを断固として拒絶し、その翌日銃殺された。党の組織的な弱さや戦術の問題の混乱と同時に、このような一般の共産党員の不屈さが存在していた。ボロジンは書いている：＜湖南の同志達は反革命に対し然るべき反撃を前もって組織することができず、また必要な部隊も集めなかった。ここに彼等の過ちがある。だが、長沙にクーデタが起こり、反革命の勝利が促進された責任の大部分は共産党中央委員会にある＞。

湖南共産党は各農民組合に派遣グループを長沙に集結させる任務を与えた。一方、共産党中央委員会は戦わないよう指令を出した。この事で彼等は途方に暮れた。ともかく、反乱は＜もしかしたら勝利しなかったかもしれない。もし中央委員会がこれとは異なる立場をとっていたなら、その運動が解体することはなく、共産党も信用を失うことはなかったであろう＞。＜共産党は自ら言ったように、技術的未熟さのため、湖南のクーデタに対して抗議のデモも兵器廠のストも組織することができなかった。予定されたデモは中止された。それにも拘わらず、3日後唐生智の前線からの帰還を歓迎したデモ

は組織することができた」のをボロジンは確認した。鉄道が夏斗寅一味から解放されるとすぐ1927年5月20日、政府はクーデタのことを知らず長沙へ向かった。政府委員会の中には、ボロジン、譚平山、陳公博等がいた。彼等は岳陽にたどり着いた。当地の守備隊本部は長沙からの指令を受け取るまで、彼等を丁重に引き留めた。委員会は何か変だと疑い、運転手を買収し、戻った。後にわかったことだが、長沙では、クーデタ首謀者は彼等の首を即座にはねることを決定していた。

1927年6月2日の〈People's Tribune〉に掲載された、全中国農民組合が湖南、湖北、江西にあるその組織に出した指令は極めて興味深いものである。この文書は事実上、革命的農民運動が余りにも極端に走ってしまったので一時中断すべきであることを意味していた。指令には次のことが述べられていた：〈農民達は自分の生活を守ろうとして、反動分子達が意図的に広めた噂に惑わされ、しばしば国民革命軍の統一戦線に損害をもたらすような厳しい手段に訴えている〉：〈悪意ある金持ちや匪賊の土地及び財産の没収は国民政府が事前に決定した規則に基づいて行わなければならない〉：〈国民政府の指令に従って世論を反映する司法機関を設立しなければならない〉：〈小地主も軍事指揮官の家族も農民と同じ程度に革命の恩恵をうけるべきである。武装グループは国民政府の指示に従わなければならない〉。農民協会は〈小商人、知識人、階級に関係なく誠実な人、革命活動家が参加することができる〉県及び郷の自治機関を設立しなければならない。農民協会は、闘いに突進する大衆を押さえる必要性を理論的に基礎づけるという、報いられない仕事を引き受けた。しかも、大衆が行動を自発的に引き起こしたので、これは明らかに見込みのない仕事であった。指令の中に、何とか農民運動の革命性を弱めるためにより穏健な要素をその中に取り込もうとする願望がほの見えていた。

6月11日の〈People's Tribune〉に掲載されたインタビューで、農民協会の総書記は農民運動の急速な発展—夏斗寅の反乱以前—を次のように説明した：政府が農民運動の持ちうる権力の範囲を決めなかったので、〈無分別な農民運動〉にならざるを得なかった。夏斗寅の反乱後、農民達は復讐心のままに行動したと伝えられた。このため全中国農民協会の幹部はより穏健なやり方を考え出さざるを得なかった。それ故、農民協会は農民階級の団結に関して積極的な活動はせず、否定的な性格を帯びた口先だけの声明活動をした。その本質は、農業革命を遅らせようとすることで、革命機関としての農民協会及びそれを支持する人々の信用を失墜させることにあった。

湖北農民組合評議会も同様な立場をとり、その決議は〈People's Tribune〉6月29日に掲載された。（農民に土地を平等に分配することを求める運動への参加を禁止——政府機関を利用して没収した不動産を入手し、貧農に貸貸する事を禁止——匪賊、悪辣な地主、反革命分子に属さない財産は没収の対象としない。誤って没収し

たものは即時、所有者に返還されねばならない等々）

私がここに引用した僅かな資料からでも、読者は共産党中央委員会の農業政策に関するボロジンの見解の正しさがわかるだろう。彼は次のような厳しいが公平な言葉でそれを評した：〈国民党“左派”のリーダー達が大衆の革命運動を抑制し、降伏の準備をしていた時に、農民運動のリーダー達は農業問題の根本的な解決を目指している農民達を無力にすることによって、彼等を助けた。問題は闘争中の農民達が何らかの過ちを犯したという点に有るのではなく、闘争が殆ど共産党の指導なしに自然発生的に展開したことにあった。共産党はコミンテルン執行委員会第7回全体会議の指令を無視し、現実の闘争ではなく決議による闘争に向かい、また、搾取者達との闘いに対する準備をしていなかった。農民運動の不幸はこの点にあった〉。都市住民、プロレタリアートによる闘争を指導することにおいても、多くの点で事態は同様であった。6月19日の〈People's Tribune〉は次のように報じた：〈湖北労働組合評議会は政府の指令に基づいて各労働組合に、湖北省における反乱者の財産の没収を、今後、組合が宣言することを政府は好ましくないと考えていると伝えた〉。これは指導のお粗末さを極めてよくあらわしたものである。

1927年6月最後の週、武漢で第4回全中国労働者会議が開催された。そこで採択された決議の中に、プロレタリアートの高い使命を理解していることを示すいくつかの点を見いだすことができる。その会議で次の声明が出された：労働者は中国革命の前衛であり、彼等は他のいかなる階級よりも勇敢であり気骨がある。〈当会議は中国の300万の組織労働者の名において次のことを声明する。我々は帝国主義者や軍閥との闘いでいかに命を犠牲にせざるを得なくとも、ブルジョアジー及び農民と団結して闘う〉。一方、プロレタリアートが不安を感じている最も緊急で重要な問題に関しては、若干の無責任な言葉が述べられたにすぎなかった：〈政府は勿論、労働者の経済状況の改善に対して策を講ずる……〉。

6月28日、全中国労働組合連合及び湖北労働組合評議会の建物に軍隊が入り込んできた。軍閥は反革命テロの始まる前に、労働者を弾圧し自分たちの安全を確保しようとした。労働者組織の指導部はいったいどう対応したか。湖北労働組合評議会は軍事委員会に代表団を送った。それは次の声明を出した：〈労働者のピケ隊は経営者が正常な経済活動を復活させるのを妨げているという訴えを考慮して、評議会はピケ隊を正規軍に編入することを求める〉。事実、第4回会議の最終日、ピケ隊は自発的に武装解除することになった。プロレタリアートの最後の支柱である労働者親衛隊は反革命の血なまぐさいテロを企てていた人物を前にして、闘わずして自ら陣地を明け渡し降伏した。〈People's Tribune〉はこの事を次のように解説した：〈労働者は現在の軍事革命を達成しようとしている政府の計画や意図を妨害しないために、控えめな任務を自ら進んで引き受けることになる……〉。

＜第4回全中国労働者会議は、この会議の母体である労働者達に自己鍛錬と自製の必要性を教え込んだ会議として、中国プロレタリアートの歴史に残るであろう。衆知のように、自製の唯一の結果は反動の猛攻を受け、算を乱して退却したことであった。そのことは特に、労働運動の活動家に多大な犠牲をもたらした：都市プロレタリアートの中で組織的に形成され始めたばかりの、若い共産党の中核は戦闘能力を失った。

革命期における大衆運動のもう一つの本質的な弱点は、それが色々な地域で色々な時期に起こったということである：ある省では革命的高揚がすでにたけなわであるのに反し、他の省ではまだ全く静かであった。そして、闘いは先進的な革命の地域が反革命によって粉碎された時ようやく、本格的に展開し始めた。我々の資料には陝西省に於ける大衆運動の記述はほとんど無い。ラーピンの書いた大衆運動の分析を知り、私はこの欠落を若干補うことができた。私はすでに、この省で軍閥と馮玉祥の国民軍との間で展開された闘いについて述べた。闘争の過程で農民運動はある期間、合法的に展開する機会を得た。なぜなら、農民運動が反動的な軍閥との闘いで彼の支えとして役だったからである。陝西省の農民達は軍閥達の闘いの結果、厳しい荒廃に晒された。2, 3年の間に土地の値段は2, 3分の1に下落した。このことを利用して大地主達は二束三文で土地を買い占めた。土地所有者の数は一段と減少し、きわめて不利な賃貸借がますます広がった。ラーピンは顧問達に次のように報告した：＜于右任が来る2, 3年前すでに、陝西省で数十人の коммуニストが農民の間に活動していた。馮玉祥が陝西省に到着した頃には、農民の間に約400人の коммуニストがいた。彼等は各地区の多数の人々と信頼関係を持っており、地下組織の農民組合や共産党支部等々を持っていた。

于右任が陝西省にやって来て、彼等が合法的に活動することができるようになった時、こうした事前の活動からただちに数多くの芽が生まれた。陝西省の辺鄙な地方に於いても、華南、華中と同じ光景を見ることができる：コミンテルンの推奨した統一戦線の政策がそこでもみられた。それは極めて弱体で、不安定で、形式的、表面的ではあったが、革命の過程で大衆の成長に大きく貢献した。1927年2月までの短期間に12万人ほどが農民組合に加入した。色々な場所で、＜紅い槍＞から反革命的な首領達が追放された後、それが農民組合の基礎となった。地主の自警団である民団にも同様の転換が起こった。農民は大変熱心に闘争に参加した。50km以上離れた村々からも全組合が大規模な農民集会に参加することがしばしばあった。これらの集会は国民党陝西委員会の指導のもとに行われ、その80%は коммуニストが握っていた。同時に、その運動は当時の中国の農村生活に広く存在していた極端な後進性の特徴を帯びていた。ラーピンは次のように報告した：＜于右任が権力を握るとすぐに、農民達は地主のボスを入れた囚人籠を西安の

国民党省委員会に持って来始めた。ここにまた一人我々が罰した反革命分子がいる。我々は彼をあなたに届けに来た、と彼等は言った＞。その際、彼等はこのような行為を認可してくれることを望んだ。．．＜ある農民集会で彼等は二人の地主を殺した。その前に、彼等はその地区の農民の間に活動していた二人の коммуニストの所へ行き、集会の決議を述べ、これらの地主の首を斬る命令を出すよう求めた。二人とも情熱的で熱血漢だったので、命令を出した＞。かくて、陝西省でも運動は馮玉祥の將校達が容認できる範囲を越え始めた。陝西省では馮玉祥地方軍に対する農民一揆が自然発生的にしばしば勃発し、大隊や中隊が武装解除されることも2, 3回あった。馮はそのような行動に断固として反対した。彼の意見では、その責任は＜左翼小児病的＞ коммуニストにあった。上記の二人の共産黨員は彼の強い要求により、国民党から除名され追放された。概して、中国北西部の大衆運動は全般的な状況に決定的な影響をおよぼすことができず、また、馮玉祥軍の中に коммуニストを支える基盤が無かった。もともと、国民革命軍の中でも共産党の立場は極めて不安定で、軍の大規模な組織のいずれにも絶対の影響をもつことが出来なかった。

私よりも事情に通じている顧問達から間接的に得た証言を主体にして大衆運動を評価すべきかもしれないが、軍隊内の状況は、自分自身の体験から明確にわかっていた。共産党は＜北伐の時期に武装化すべきであったし、また可能でもあったが、残念なことに、この課題は実現されなかった＞というボロジンの総括は全く正しいと思う。実際に共産党が支配していたのは基本的に葉挺の師団と中央軍事政治学校武漢分校だけであった。夏斗寅の反乱を鎮圧した功績は正に葉挺にあった。葉挺は彼を二度の流血の戦いで粉碎した。1927年7月の前半、国民党は第4軍、第11軍以外の全軍から共産黨員を追放する事を決定したが、間もなく第11軍長は葉挺を第24師団長のポストから解任することを要求する最後通牒をだした（＜私をとるか葉挺をとるか＞）。幸いにも、武漢政府は蒋介石と闘うために第4, 第11軍を南昌へ投入することに決めた。それによって葉挺の第24師団と賀龍の第20軍は九江地区に行くことができた。それは後に、1927年8月1日の南昌蜂起を可能にした。その時まで改組された共産党中央委員会は、張發奎の軍に共産黨員を長とする連隊が10個ほど有ると判断し、広東で農業革命を行うためにそこへ移動するよう勧めた。共産党が国民革命軍内で実際に獲得した拠点は反動派に対し素早く、且つ効果的に反撃するには明らかに不十分であった。

ボロジンの見解では、コミンテルン執行委員会は自己の軍隊を持つ必要性を明確に指示したが、それを実現するための行動は何も成されなかった。中央委員会のメンバーが単にそのことを論じただけであった。華中の反革命クーデタは軍隊の圧倒的多数の、参加か或いは暗黙の支持のもとに行われた。



## 軍事指導者達の進んだ道

武漢<左派>が反革命陣営に移った最終的な要因は馮玉祥の取った立場であった。彼の軍隊内で、コミニストの影響力は実際は国民革命軍内よりも弱かった。それにも拘わらず、7月までは彼の国民軍は客観的にみて革命的役割を果たし、全中国の政治状況の改善を促進した。1927年2月までに国民1軍とその同盟軍は15万に近い兵員を有していたが、武装して前線へ出撃できる彼の主力部隊はこの数の半分にしかすぎなかった。この頃、彼は顧問達に出来るだけよい態度で接し、ソ連からの武器の供給を望んでいることをほめかし、顧問の数を増やすことを求めた。馮玉祥軍の将校達は時に、国民革命軍の大成功が蒋介石の軍事能力によると説明しがちであった。それは馮玉祥をいらだたせた。〈とんでもない彼は反論した一国民革命軍の成功は蒋介石ではなく国民党と軍事作戦を指導したガリンのお陰である〉。彼は上海と南京の占領を祝って、祝賀会とパレードを行った。この祝賀会で彼と、う右任、労働者や農民や女性の代表者達は手をつなぎ国民党の旗の周りを回った。だが、この感動的な光景は芝居がかった性格を帯びていた。馮玉祥は全く冷静な計算をして行動した。彼は左翼勢力に対して如何なる政治的な束縛にも陥らないように努めた。

彼は国民党陝西委員会の会議や毎週開かれる西安の国民党会議に招待されたが、いつも出席しなかった。1927年初めに行われた国民党第一回省大会で、僅か15分間極めて一般的な話をしただけだった。その代わりに、3月8日国際婦人デーを祝った時、ソ連の男女同権と中国の女性解放の必要性について甚だ雄弁に語った。要するに、彼は革命の任務に関して一般的な計画については進んで話したが、いかなる言質も差し控えた。ラーピンは指摘した：〈鄭州出撃までの彼の立場の特徴は次のように言えるだろう：彼は農民達の邪魔をしないが、援助もしない〉。彼の手法は極めて現実的であった。彼は農民達が国民2軍に反対した限り、彼等に同情的であった。

大衆運動が進展するにつれて、馮玉祥はますます右傾化していった。陝西省の共産党の新聞に対して厳しい検閲が行われた。農民達に革命的行動を呼びかける記事に対し、その編集者を厳しく罰することが決定された。しかし、その人はぎりぎりのところで逃亡した。農民の〈勝手な〉行動に対して銃殺を含む罰が導入された。馮玉祥は指揮官を前にした演説で、今度は、地主に対する農民の闘争は革命にとって有害であると主張した。

西安の小さい兵器廠で経済要求のストライキが始まった時、その指導者達は逮捕され、1927年6月、数人の共産党幹部も逮捕された。その一月前、軍の政治部員は秘密会議を開くと罰せられると宣告され、孫文の〈三民主義〉を批判することが禁じられた。政治部員は統一した宣伝を行うという誓約書を求められた。これらはすべて共産党に向けられたものであった。それは馮が支配

している地域では常に非合法の組織であった。今や、彼の立場は彼の部下の政治的立場によって決定された。彼の将軍達は自分たちのリーダーが気前よく発言している革命的スローガンを、言葉の上では認めたが、本質的には骨の髄まで軍閥のままであった。ラーピンは宋哲元將軍との対談から次のことを知った。1926年3月18日北京での革命的學生によるデモに対し悪名高い射殺が行われ、馮玉祥の將軍である李興中やその他数人の將軍がそれに加わっていた。將校達の一部は軍閥と同様に、自分の軍隊を〈生計〉のための手段と見なした。

例えば、陸鍾麟將軍は1925年に天津で獲得した金によって北京で企業を、天津で賃貸マンションを手に入れた。以前は軍管区司令で、その後甘肅省の督弁の補佐となった張之江將軍は北京に250人の労働者を持つ大きな缶詰工場を持っていた。奉天軍がそれを没収しようとした時、彼は若き元帥張學良を共同出資者に取り込み、事業を継続した。その上、彼は大地所有者で商業も営んでいた。要するに、馮玉祥の高級將校達は半ば地主で、半ば商人であった。彼等の〈金儲け〉は、軍の中での金儲けの行為が誰にもチェックされなかったもので、いっそう容易にできた。数ヶ月、馮玉祥は自分の支配地域に閉じこもり、国民革命軍を積極的に援助しなかった。彼が武漢軍に協力することを決めた時でも、多少とも規模の大きい戦闘は避けた。最大の戦闘は洛陽付近で行われたが、ここでも作戦に参加した敵側はわずか数千であった。彼は次のことから作戦をたてやすくなった。〈紅い槍〉が4月に洛陽地区で河南の將軍達に大規模な出撃を行い、45の県を包囲し、3週間にわたる大激戦を展開した。何百もの村が破壊され、家々は略奪され、果樹は切り倒され、食器さえも割られた。馮玉祥は洛陽を占拠した後、急いで先に進もうとはせず、武漢政府の指導者達が彼に積極的に行動するよう、電報で何度も求めたにも拘わらず、鄭州と開封を占拠したのはようやく5月30日—31日であった。

馮玉祥は蒋介石のクレータや自分の政治的立場に関して、長い間如何なる発言も控えていた。まだ彼が西安にいた時、彼を説得するために、武漢と蒋介石の両方から代表者がやって来た。蒋介石は馮玉祥に、奉天軍が武漢国民革命軍を撃破するまでは奉天軍に進撃しないよう、そしてその後で、我々は閻錫山と手を結び奉天軍と闘おうと説得した。この説得は効果的であった。馮玉祥の將軍達は武漢政府のテリトリーでの革命的な事柄やそこで生じた困難な経済状況に不安をいだいた。とりわけ彼等が恐れたのは自分たちだけが奉天軍の敵になることであった。蒋介石に反対するポスターがどう関の城壁から一晩で無くなった。2日後には蒋介石を非難するパンフレットが没収された。最後に蒋介石反対の宣伝を禁止する指令が全軍に出された。同時に、馮玉祥は武漢に密かに電報を送り、彼があらゆる点で国民党中央執行委員会を支持すること、国民革命は大衆運動に基づいていることを伝えた。西北地域に国民党によって創られた政治分

会は馮玉祥の策謀をよく知っていたので、彼の政治路線について本音の発言をさせようとあらゆる手を尽くした。ウスマーノフをチーフとするソ連顧問団もこの目的を達成しようとした。だが、馮玉祥はく内輪の恥を外にさらけ出すべきではないと繰り返した。鄭州へ進撃する前に開かれた軍の政治部員の大会に多くの коммуニストが出席したが、そこで馮玉祥は蒋介石に関する問題を全く審議からはずそうとし、さらに自分の居るところでは決議の採択を避けようとした。

1927年5月半ばから、武漢国民党のかつてのリーダーの一人、徐謙が馮玉祥のく片腕>となった。彼は蒋介石を受け入れるよう馮玉祥に働きかけていた。馮玉祥は鄭州でく左派>と会談した際、不気味に沈黙を守ったが、西北地域と河南省に政府を組織することを提案した。彼の勢力圏内での国民党西安政治分会は右派で補充され、この機関の常任書記である коммуニストはそのポストからはずされた。馮玉祥は коммуニストが多数を占める国民党河南委員会が背後で混乱を引き起こすような、誤った政策を実行していると声明した。この委員会のメンバーを更迭するために、政治局は徐謙を長とする委員会を創った。それには右派だけが充てられた。1927年7月半ば、馮玉祥は徐州で蒋介石と会談した際、 коммуニストに反対し、ボロジンの退去に賛成する共同電報文に署名した。それによって完全に反動陣営に転落した。

当時、彼のような中国の有力な政治的人物のこうした変遷は極めて典型的であり教訓的である。非常に革命的で仰々しい言辞から恥知らずの革命利益の裏切りまでの同様な道を他の多くの指導者も歩んだ。唐生智の政治的立場の同様な変遷は武漢の革命政府にとって極めて重要な意味を持っていた。この将軍は武漢の軍事指導者の第一人者で、河南作戦を指揮した。彼は口では革命的言辞を述べたが、彼が第一に心がけたのは、自己直属の軍隊が強力な奉天軍と激戦を交えないために、それを後方に配置することであった。彼は前線に先ず第4、第11軍を投入した。というのは、両軍は唐生智に敵対的であり、賀竜の同盟軍でもあった。だが、彼は武漢の状況を自分の思いどおりには支配できなかった。何故なら、ここには葉挺がおり、黄は軍校分校があったからである。クーデタのほとんど直前まで唐生智は大衆の気を引いていた。そして我々が見たように、彼はある人々をうまく欺いた。唐生智と第36軍の指揮官達は коммуニスト、蘇兆徴の大臣就任を公式に祝い、労働者の利益と幸福のために闘うことを勧めた。彼は湖南省のクーデタに反対の宣言を公然と行い、孫文の三民主義を今後も実行すること、蒋介石に対し積極的な作戦を即時取ることを要求した。正にここに彼の見せかけの革命精神の源泉が隠されている。彼は蒋介石を権力闘争における最後の敵意あるライバルとみなしていたので、彼の力を強化する可能性のある行為は全て恐れた。彼は武漢政府委員を湖南省へ送るよう求めた。彼は訴えた：く労働者農民運動内部にく左翼小児病>がある。だが、それを銃剣で治してはならない。

湖南政府は以前のものでなければならない。労働組合と農民組合を復活し、ピケ隊に武器を返却しなければならない。許克祥は国民党軍にとって無益な将軍であり、彼を罰しなければならない>等々。

鄭州会議の後、武漢政府は反革命の調査のため彼に長沙へ行くよう頼んだ。彼の出発前に湖南省国民党代議員の200名以上が彼の所へやって来た。唐生智は、くたとえ国民党中央執行委員会が労働者農民運動の若干の無分別な行動を正さねばならないとしても>、湖南省の労働者農民はもうこれ以上迫害されることはない、と保証した。彼は自分の演説をく湖南省の革命的な大衆万歳>というスローガンで締めくくった。1927年6月下旬に唐生智は長沙に着いた。ここで彼はほとんど180度転回した。反革命の行為を全て是認した。彼は国民党中央執行委員会政治局宛の電報で次のように断言した。許克祥は誠実な人で、単にく労働者農民と対立する間違った方法を探った>にすぎない、湖南事件の主要かつ根本的な張本人は彼を間違った道へ導いた労働者農民運動の指導者達であった。唐生智は湖南省への出張報告書に次のように書いた。く私は色々な公式の訴えを審査して次のことがわかった。労働者農民運動は自分たちの指導者の誤った指導の下で野放図になり、全住民をテロの犠牲にした>。それはく残酷な階級闘争を鼓舞している>。軍隊は自衛せざるを得なかった。国民党及び民衆組織の解体は不可欠であった。許克祥の行為はく正義の希求に基づくものであった>、警告という形で彼を処罰するだけでよいであろう。彼はまた大衆運動の再編成について提案した。そのために特に、労働者や農民の指導者養成のための専門学校を創設するというものであった。同時に、彼は革命家達と共に闘うための権限を要請した。1927年6月29日、唐生智の報告書はくPeople's Tribune>に掲載された。

このような急転を一体どう説明すべきだろうか。なにしろ唐生智はとても慎重で用心深い政治家であった。これは単に大衆運動の将来性に対する彼の評価から生じただけではないように思われる。湖南省を獲得しようとする軍閥達の闘いも起こっており、その中に加わっていたのは蒋介石、何建、唐生智、譚延かい（彼の支持者の2人が許克祥委員会にいた）で、程潜さえも加わっていた。当地で唐生智だけは敵側の兵力を最終的に評価し、その後の方針を決めることができた。いずれにせよ、忠実に革命に尽くしていた軍事指導者の一人がまたもや革命思想を裏切り、それによって武漢の革命センターの没落を早めた。

李済深を長とする広東軍閥の上層部の政治路線も同じように作られていった。広東省では、当地の住民の抑圧には関心を持たず、若干の左翼的傾向を容認する非広東部隊が去った後、反動勢力が力を得てきた。蒋介石は最初、退却の場合根拠地を確保しておくために、彼直属の軍隊を少数残して置いた。李済深が次第に広東に駐留する全部隊を支配下に治め、あたかもく静かな>反革命

クーデタを実行した。国民革命軍が江西省を占拠するや否や、李済深は蒋介石に労働者農民運動を抑制するよう求める電報を送った。国民党広東小委員会は私が以前に述べた江西省の例に倣って組織替えされた。軍閥の直接の脅威を受けて<左派>やコミュニスト達は委員会から追放された。広州のクーデタに伴って起こった反革命テロは激しさの点で、上海に劣らなかった。1927年4月前半に蒋介石と李済深の協議がもたれ、革命の鎮圧についてその後の方策が話し合われた。要するに上海や南京の反革命クーデタは政治屋の多くの陰謀、策略、旨味のある地位を求めての密約、相互の噛み合いを伴った。8月蒋介石は南京政府と武漢政府間の交渉を確実なものにするために、一時的にポストを離れざるを得なかった。

1927年9月中旬に国民党大会が開かれた。そこで国民政府政治委員会、軍事委員会、馮玉祥、唐生智、李済深、朱培徳、譚延闓、胡漢民、蒋介石、汪精衛、閻錫山、何応欽、白崇禧、程潜、李宗仁、楊樹莊の14人から成る幹部会が設立された。一口で言うと、彼等は全て職業軍人ではない軍閥の<エリート>であった。彼等は本質的には和解しがたい敵であり、短期間彼等を団結させることが出来たのは、彼等に共通した大衆に対する嫌悪と革命を前にしての恐怖のみであった。間もなく上海をめぐる何応欽と広西軍閥との闘い、武漢をめぐる広西軍閥と唐生智との闘い等々が始まった。1927年11月、南京側は唐生智を打ち負かし武漢を獲得した。だが、それでも反動陣営内の噛み合いは静まらなかった。以後、この軍閥間の争いを利用して、人里離れた山岳地帯やその他の近づき難い地域で党のゲリラ戦が展開された。

1925—1927年の革命は終わった。中国人民は一時的な敗北を喫した。主要な原因は勢力の不均衡であった。軍閥、地主、紳士、買弁、帝国主義の略奪、彼等の代理人は自由を求める闘争に立ち上がった勤労者や彼等の指導者よりもかなり強力であり、政治的に経験豊富であった。だが、革命前の古い中国と革命の炎で浄化された新しい中国は比較できない程異なっていた。革命は何百万もの人々の目を開き、彼等の手にコミュニストの旗を渡した。もう歴史を引き戻すことは出来なかった。

当時、帝国主義者による反革命が中国へ輸出されるのを阻止する力がソ連には無かった。我々自身が近代的な産業を持たず、農村には集団化が導入されておらず、軍の力は先進的な技術よりも革命的不屈の精神に依存していた。しかし、遠い日々、祖国が中国の働く人々を支援するために出来る限りのことをした、という思い出は我々にとって貴重なものである。そして私が直接この国際的な偉業に参加したことに喜びを感じている。

最後まで自分の職務を果たす

ソ連の顧問達は中国革命の高揚期に、そのすばらしい発展に多大な貢献をした。すでに読者はこの事を雄弁に

物語る多くの事実を知っている。ここで私はボロジンの活動の全般的な評価という難しい問題について検討してみたい。今のところそれに必要な全ての記録を用いることは不可能であるが、それでも、正しい、客観的な理解を得ることは可能であると私には思われる。革命の敗北の後、その責任をすぐさまボロジンに負わせようとした人々がいた。ボロジンのある幾つかの発言に対し明らかに悪意ある解釈をし、彼の本当の見解をゆがめた。その際、今日では明らかになっていることが忘れられたり、曖昧になっていた—ボロジンが革命の高揚期に成し遂げた組織化と実際の仕事の莫大な量、統一戦線の確立と強化を目指し、革命を確実にするためにあらゆる可能な同盟者を結集しようとする彼の耐えざる努力。

ボロジンは当時中国問題に関して何度も行われた、極めて情熱的な、妥協を知らない討論に加わった同志達とは異なり、中国の現場で、特殊性と複雑さの限りを尽くす闘争の真っ直中にいたことを忘れるべきではない。1万km離れた所から見ると論証を必要としない程自明と思われることが時には、具体的な状況を全般的に考慮しなければならぬ極めて困難な問題に変わった。それ故、ボロジンの下した決定は今日では、慎重に検討されるべきであり、それ以後中国で起こった全ての事柄を考慮して再評価されなければならない。1920年代のボロジンに対する批判者の発言によく見られた、彼の可能性の過大評価をも捨て去らねばならない。ボロジンは国民政府や国民党内の革命派の中では極めて重要な立場にはあったが、孫文の招いた顧問以上の者ではなかった。彼は特定の状況の下で活動した：十分な情報はなく、大衆との広範な交流の可能性はなく、モスクワとの常時の連絡はなく、適切な補佐も少なかった。彼は、革命指導者の極端な未熟さや数の少なさ、様々な派閥や傾向の存在、小ブルジョア的傾向の極めて強い影響などの現実の要素を考慮に入れねばならなかった。これら全てのことを考えると、ボロジンがそれにも拘わらず中国で成し遂げたことに對し特別な尊敬を覚える。

私は中国に於けるボロジンの活動を分析するための理論的、政治的知識を私自身十分持っているとは思わないが、私はボロジン自身や彼に関する幾つかの見解や発言を読者に紹介したい。彼はソ連から新たにやって来た顧問団を前にして演説をし、状況を彼等に知らせようとした。ボロジンが中国の特殊性に関して理解していることを分からせるような、幾つかの発言が聞かれた。例えば、彼は当時の中国のプロレタリアートには多くの弱点があると判断した。もし現代の尺度で工場プロレタリアートを問題にするなら、それは先ず、外国租界のプロレタリアートであった。中国革命にとって3つの階級の同盟が基本となるであろう：プロレタリアート、農民、都市の貧民。＜大部分の都市は手工業を持ち、中世のままであり、政治的に活動的な都市貧民で飽和あるいは過飽和の状態であった。この事は革命を展開する際忘れることは出来ない＞。都市貧民が要求したのは安定通貨、債務の



棒引き、統一貨幣制度であった。このようにプロレタリアートはまだ弱体であった。しかも中国の農民階級は国家を組織することが出来ない。この事から革命が間近に起こるという見込みに対して極めて慎重な判断があった。

ボロジンの周りに若い理論家の小さなグループがあった。(広州-ボーリン、タルパノフ、ヨルク、シナーニ。漢口-ラズモフ、リマノフ等々)。彼等はボロジンの指示で中国の最も重要な幾つかの社会問題の研究に取り組んでおり、彼は彼等の何人かとは意見が一致した。陳独秀や他の中国共産党の指導者の持つ右翼日和見主義的傾向について度々文献の中で語られたが、革命陣営の中にあつた極左的傾向についてはあまり明らかにされていないように私には思われる。ボロジンは、極左は成立し得ないこと、過度の革命的要求等々は時期尚早で、ただ統一戦線を破壊する力となるだけでその代わりに何も生み出さないことを証明するために、かなりの力を注いだように思われる。ボロジンのこうした面を研究する必要がある。

革命の過程の中で、ボロジンは与えられた状況の現実的な可能性を全て考慮することが出来る、最も経験豊かな戦術家としての役割を何度も果たした。北伐の4つの課題を次のように述べた：1) 大衆運動の進展；2) 帝国主義との闘い；3) <中山鑑事件関係者>を弱体化するための作戦(特に<保定軍官学校派>と彼等との矛盾を利用)；4) 独自の革命的、共産主義的な部隊の創設。周知のように、共産党軍は実現できなかった。もっとも彼の意見では可能であった。何故なら、呉佩孚と孫伝芳の軍隊が壊滅した後、共産党の武装化した部隊をつくるチャンスがあった。ボロジンは大衆運動を進展させるためのあらゆる戦術的手法を利用する才能があった。彼は農民運動の要求が拡大するにつれて、村の搾取者と結びついた軍閥の反撃が起きることを知っていた。それ故、彼は軍隊が政治と関わらないように、また軍隊をその勢力範囲の省から引き離すために北方への進撃を一層促進した。ボロジンは武漢の革命センターを重要視した。というのは、それが数ヶ月存在したことによって中国の広範な大衆は壮大な実際的な革命を経験した。パートナーの個性を十分考慮した柔軟な外交官ともいべきボロジンも必要とあらば、単刀直入な発言をすることが出来た。

私が既に言及したように、1927年1月、蒋介石は政府の所在地の問題を決定するために武漢へやって来た。彼を歓迎する軍事組織及び政府代表者の宴会でボロジンは次のような演説をした。<孫文は我々が正に実行しなければならない‘三つの政策’について遺言を残した。孫文の三民主義、特に三つ目の‘民生’と彼の‘三つの政策’を実行せず、中国を統一することが出来ると考えている人は誰でも孫文の信奉者ではない。続いてボロジンは‘三民主義’と三つの政策を一掃しようとする反革命が迫っていることを指摘し、それとの闘争を呼びかけた。彼は述べた：<私は将軍個人の顧問ではなく、中国

の革命的な、抑圧された人民に援助を与える者である。私には失うものは何もない。もし、私が明日死ねば、国民政府が私を政府の金で葬るにちがいないが、私は抑圧された人々に反対の立場をとることは決してない。私は将軍の誰かに気に入られていないなら出て行くが、私は将軍ではなく抑圧された人々を助けるつもりである>。ボロジンは蒋介石との決裂はこ嶺会議のあった1927年1月3日にはもはや避けがたいものであると思った。

武漢時代の最後の段階でボロジンはいわゆる<西北理論>-ソ連の国境により近い西北へ革命勢力を一時的に移す-を擁護した。彼は<武漢政府の首脳達>が統一戦線を今後も継続する見通しを後に次の言葉で語った：<少なくとも我々が労働会議や労働者-農民の民主的独裁について率直に話せるようになるまでは、ブルジョワデモクラシーを実行できればと思ったが、恐るべきテロがこのデモクラシーを襲った>。<武漢の‘左派’が蒋介石と手を切った場合、クーデター紛いの反革命に独力で対抗することが出来たし、或いは南京に対し‘左派’勢力を組織することが可能であった>。後者の政策の結果、第4、第11軍また第20軍が九江-南昌線へ進出することが出来た。それが後に南昌蜂起を実現させる要因となった。

シナーニは1927年10月、武漢時代について回想している：<この時期(例えばミーフ、クチュモフ、カレニヤ、私などが居た時)ボロジンは中国共産党が労働者運動や組合を実質的に指導しているかどうか、一度ならず強い疑問を示した>。ボロジンはコミュニストの実際の影響力を強めることを願って、早くも1926年12月、コミュニスト達に、陳独秀も含めて必ず政府に入るよう提案した。よく知られているように、これはなかなか実行されず、効果も上がらなかった。ボロジンは中国共産党が軍隊内にも確実な支柱を創り上げるためにも、出来る限りのことをした。後に、党歴の長いソ連共産党員達に語った：<我々があらゆる所で武器を手に入れようと努力したことは信じてください。だが、極僅かしか手に入らなかった>。ボロジンの活動の功績を評価する際忘れてならないことは、革命の最後の段階で彼は自分の生命を犠牲にする可能性が極めて高かったことである。それは中国からの出国の経過を思い出すだけで十分である。

ボロジンは武漢からこ嶺に到着した。ここで宋子文が彼を訪問し、上海を経由して帰国することを提案した。この時ボロジンを救ったのは宋慶齡で、彼女はこの提案を絶対に受け入れないように助言した。彼女は<宋を信用してはならない>ときっぱりと言った。明らかに、宋慶齡は既に自分の弟の人となりをよく知っていた。当時、彼は財政大臣であり、数年後には国民党右派の中国最大の財閥の一人になった。1927年7月16日夜、ボロジンが漢口を去ると、もう午前2時には長沙のクーデタの積極的な参加者である何鍵将軍が彼の宿舍とオフィスを急襲した。ボロジンは洛陽に向かった。彼がそこへ着



く前に南昌蜂起が起こった。8月2日、汪精衛は国民党中央執行委員会政治局会議でヒステリックに叫んだ：「二、三人のロシア人の首を斬らねばならない。そうすれば、彼等は蜂起を行うほど馬鹿ではなくなるだろう」。8月4日「武漢政府」はボロジンを即刻逮捕するよう馮玉祥に電報を送った。だが、馮玉祥はボロジンを無事に祖国へ戻らせる方を選んだ。

勿論、汪精衛の絶叫が事件の進展の真相を正しく反映していると見るべきではない。南昌蜂起は中国コミunist達の英雄的偉業であり、闘争を続ける彼等の覚悟の現れであった。しかし、反動派の口にする憎悪が我々顧問達とボロジンに集中したことは特徴的であった。ボロジンは中国ではかなり独立して行動し、時には相談する人もなく、またある時は誰からも指令を受けることがなかった。ここに彼自身の言葉がある：「中国での我々の闘争を初めて具体的に述べた決議、つまり1926年12月のコミンテルン執行委員会第7回全体会議の決議に関して言うと、残念ながら、それは1927年3月、我々が既に長江に到達していた頃やっと届いた。それは我々が広州から漢口への途上にあったからである。我々が漢口に到着して間もなく、我々に対して帝國主義列強と北洋軍閥による封鎖が事実上始まった。中国各地からの情報は漢口同様、極めて悪いものだった」。ボロジンは実際、漢口から鉄道と車を用いて2ヶ月以上かかって帰国した。以上のことから文書使による連絡が不可能であったことがわかる。一方、電報は帝國主義者の手中にあった。しばしばボロジンのもとへ電報の一部しか届かなかった。反動派の有名な挑発行為—ソ連大使館や上海領事館襲撃—の後、我々は漢口で何週間も全く何の情報も入手出来なかった。

読者は上記の引用文を読んだ際、恐らくボロジン特有の「我々」という言葉に気がついたであろう。これは非常に意味のある言葉である。ボロジンは自分と中国革命を一体化しており、その成功も失敗も自分自身のこととみなしていた。もっとも当時、我々全員がそのようであった。私はボロジンの活動を評する際、彼の活動がすべて正しいとか、彼が重大な誤りをしなかったと言うつもりは全くない。ボロジン自身も後に自分の誤りを認めた。私の意見では、その誤りの中には彼が実際に犯したものだけではなく、彼が自分でそう思ったものさえもあった。革命活動の真っ直中にいた、古参のボルシェビクで、極めて経験豊富な政治家の見解は非常に大きな価値を有していることだけは言えると私は思う。私は次のことをもう一度強調したい：軍事顧問達は政治過程の思慮深い分析家でもあった。彼等は概して、自己の見解を書き記すことに力を用いず、実際に活動して、革命の流れを強化し発展させるために出来る限りのことをした。

例えば、ブリュヘルは、国民革命軍の北伐及び東進の過程で、いわゆる「追従者」の大量流入が軍にもたらす危険を適時に察知し、作戦を立てる際に、それを考慮に

入れた。軍閥の将軍、賀耀組、葉開きん、周鳳岐等は政治的立場を殆ど変えず国民革命軍に加わった。彼等のために幾つかの新しい軍が編成された。このためブリュヘルは早くも1926年11月に見せしめとして、第4軍と称している賀耀組軍を武装解除し、「追従者達に軍律を守らせる」ことを提案した。だが、「中山艦事件」後、ブリュヘルは自分の立案に大きな制限が加えられた。蒋介石はブリュヘルの活動を作戦指導の助言のみに制限しようとした。ブリュヘルは軍の編成案と軍事予算の分配方法を提案した。これらは全て言葉の上では受け入れられたが、その後でこれとは全く逆の考えが実行された。

ブリュヘルの大きな特徴は、彼が政治的相互関係を慎重に分析しただけでなく、分析の結果を他の顧問達に知らせようと努めたことである。1927年1月初め、軍事会議が南昌で終わり、直ちにブリュヘルは顧問達に「軍事会議をめぐる闘争の解説」という文書を送った。彼はその中で、希に見る洞察力をもって今後の発展の趨勢を指摘している：「大衆運動を恐れて、右派グループと行動路線の右派的傾向が形成されている。総司令は概して、我々の中国の同志や左派の人々を信頼していないようだ。当地の左派は先鋭化していく大衆運動に驚き、その穏健化、特に労働運動の穏健化の必要性を話し合っている」。ブリュヘルは一体どのような結論を出したか。この数ヶ月ずっと次のことは彼にとって揺るぎなき信念であった：中国革命の進展にプラスの影響を及ぼす可能性が有限り、我々は最後の瞬間まで、右派のあらゆる妨害を何とか切り抜け、任務を遂行すべきである。ブリュヘルは文書の中で次のことを勧めている：「我々の活動を従来通り続けねばならず、作戦上のアドバイスと軍の組織及び戦闘準備態勢に関して活動を深める....」。

同じ時にブリュヘルはボロジンに次のような自分の分析を送った：右派の陰謀に対して「左派」やコミunistが「外科的手段」をとった際、第何軍が彼等を支持するか。ブリュヘルは第8軍、第6軍、第2軍、第4軍を支持するグループに入れ、第7軍、第3軍は恐らく「左派」の積極的な活動に大きな障害とはならないであろう。

ボロジンもブリュヘルに、南昌から出来るだけ早く武漢へ移れるよう、ブリュヘルの権威を用いて政府首脳に働きかけてくれるよう頼んだ。そうすれば、革命センターの問題に関する右派との衝突は既成事実という形で解決されるであろう。ブリュヘルがこの依頼を果たしたことは疑う余地はないであろう。ブリュヘルは右派の漠然とした、秘かな、また時には露骨な抵抗の故に、極めて困難な状況下で活動せざるを得なくなった。1927年の初めに彼は知らせてきた：「私は監視付きである。訪問者の数が減った。国民政府や中央執行委員会のメンバーと対話することが困難である」。他の顧問達も同じような状況のもとで活動していた。それにも拘わらず、彼等は精力的に活動を続けていた。孫伝芳及び呉佩孚の残存部隊と山東軍閥張宗昌の結託を恐れて、顧問達はせっ江作戦を積極的に進めた。「長江下流地域の敵軍一

掃作戦計画>がブリュヘルの直接の指導のもとに作成された。革命の武漢段階で北伐の継続問題が生じた時、我々同志の間で進撃の方向に関して意見が分かれた：1) 蒋介石を攻撃；2) 河南方面；3) 広東へ撤退。ボロジンは1927年5月、北伐継続に賛成の発言をした。彼は、国民革命軍が馮玉祥軍と連合すれば、武漢政府の軍力は強化され、正にそれによって蒋介石の軍力に対抗出来ると予想した。当時、武漢から立ち去る必要は全くないと考えた人もいた。主要な任務は武漢地区で自己の立場を強化することである、というのがその理由であった。ブリュヘルは、奉天派に打撃を加え、彼等に対する戦線を馮玉祥に任せ、その後ロンハイ線に沿って南京へ進撃するために、精力的に河南へ前進することを主張した。ブリュヘルは蒋介石に対する進撃を組織化することを支持した。しかし、他の顧問達と同様に、彼も形式的には武漢政府に所属する軍隊に確実な信頼を置くことが出来なかった。また、これらの軍隊の將軍達が蒋介石に対して軍を向けるかどうかにも、確信が持てなかった。この問題は一部の同志達が考えたほど単純ではなかった。

この問題の決定に際し、恐らくブリュヘルにも何らかの動揺が有ったであろう。私は南京から漢口へ船でやってくる途中で風邪を引き、漢口に到着してから長く入院していた。ブリュヘルは何度も私を見舞ってくれた。私は何応欽と共に仕事をした最後の数ヶ月の経験から、顧問として今後活動を続けてもそれ程役に立たない、と考えるようになった。私が既に書いたように、右派の人々は図々しくなり、私に全く仕事をさせなかった。私は帰国する許可を求めた。ブリュヘルは半分冗談に、半分真面目に反対した：<蒋介石を破るまでは駄目だ。それは君の仕事だ。君は彼の軍隊を組織し訓練した。それと闘うべきだ>。ブリュヘルと顧問達は武漢革命センターが存在した最後の数日まで、精力的に仕事をし、状況を改善するために極僅かの機会でも利用しようとした。幾つかの例を挙げよう。武漢の国民党の幹部と共にブリュヘルは鄭州会議へ派遣された。会議の始まる前、汪精衛は中山艦事件当時と同じように、<革命的>美辞麗句を全く捨て、変身し、降伏を受け入れようとした。<多分、我々は南京進撃の提案を今後すべきではないでしょう>と彼はブリュヘルに尋ねた。ブリュヘルは全力を上げて彼を説得し、馮玉祥や將軍達の前で敗北を認めないようにさせようとした。長い会談の末、汪精衛はブリュヘルと接触してエネルギーが充電されたかのように、断固として手を振り言明した：<私は南京進撃に賛成する>。

もう一つのエピソード。1927年4月末、朱培徳のかつての顧問リマノフは彼を武漢側に引き入れようとして、特別にこの將軍を訪ねた。或る会談の中で、中国共産党との関係の問題が提起された。<コミュニストと決裂することはとりもおさず革命と決裂することである。成功は孫文の三民主義を実行することによってのみ達成することが出来る>とリマノフは朱培徳を懸命に説得し

た。將軍は賛同した：<是的（そのとうり）><是的>。よく知られているように、朱培徳は他の軍閥のように軍隊内のコミュニストを即座に弾圧することはやらなかったが、結局、江西省で反革命路線に進んだ。だが、リマノフのこの訪問は、顧問達が革命の活動家達を救うために、最後の日まで出来る限りのことをやろうとする彼等の根気強い願いを物語っている。

顧問達は国民革命軍内部で活動していく中で、中国共産党のもとに軍隊内の革命家達を結集させるために、絶えず全力を尽くした。或る顧問が報告書の中で指摘した：<我々顧問達は葉挺軍の兵員に関する問題を湖南の党委員会に何度も提起した。委員会は毎回承諾したが、その後、その約束は実行されなかった>。我々の努力はここでも成果をあげなかったが、それは決して革命事業を助けようとする根気強さと熱意が欠けていたためではなかった。我々顧問達は中国革命に携わって滞在したまさに最後の日まで、自己の国際的義務に忠実で、中国人民の解放という偉大な事業に身を捧げ、革命のために生命を犠牲にする用意があった。革命は一時的に敗北を喫した。顧問達は色々な経路で敵地を通り抜け、ようやく祖国へ帰った。多くの顧問達は国民党反動派の嘲笑に耐えねばならず、投獄される者さえあった。我々は皆最後まで義務を果たしたという誇らしい気持ちを抱いて中国を去った。

遺憾ながら、私は南京から漢口へ戻った後、病気が長引いて、働くことが出来なかった。ブリュヘルは私を河南作戦で唐生智総司令の顧問にするつもりであったが、私の代わりにオリシェフスキーが顧問に任命された。その後、私は四川省へ出張することになった。しかし、私が退院する前に、武漢政府の反革命の意図が明らかになり、顧問達の仕事は終わりとなった。私はミーシャ・チヘイジェ顧問と共に上海を通り祖国へ向かった。中国人民解放闘争への私の参加は是で終わったわけではなかった。10年後、我が国は国際主義の原則を忠実に守り、日本帝国主義の侵略を受けた中国に再び援助の手を差し伸べた。私は多くの同志と共に、心から愛している中国の大地へ出発した。それは私が顧問団長として再び中国人民に役立つためであった。